
HOLY 『K』 NIGHT

est

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H O L Y 『 K 』 N I G H T

【Nコード】

N 1 5 3 8 D

【作者名】

e s t

【あらすじ】

ある黒猫のお話。 B U M P | O F | C H I C K E N の名曲を小説化した実験作です。

前編

一匹の黒猫が、週末の大通りを歩いていた。

宵闇に溶け込んでいたのなら分からないだろうというほどの漆黒の毛色。後ろに特徴があった鍵尻尾を水平にしながら、まだ高い日の下を人間にまるで臆することなく威風堂々と大通りを闊歩している。

不意の音。

乾いた音は後方から。黒猫は振り返る。

「あゝっ、おっしいなあゝ！ もう少しで当たったのにさ！」

彼の五メートルほど後ろで楽しそうにはしゃぐのは子供達だ。彼らの誰もが、その小さなてのひらに小石を握り締めていた。

それを見て黒猫は小さくため息を吐く。

黒猫は、不吉の象徴である

誰が言い出したのかは分からない。いつからそう呼ばれるようになったのかは分からない。

もしかしたら、闇に溶け込んでしまいそうな姿がそう喚起させたのかも知れない。

起源はどうあれ、『黒猫は忌み嫌われる存在』というのは定着した常識だった。

黒猫は走り出す。それを追う子供達。

次々と飛んでくる小石。時折小枝や缶なども混じっている。

更に走る距離が伸びるほど、投げ付けられる物の量が増えていく。方向も後ろからだけではなく、左右、時には前から飛んでくる。

単純に、黒猫に向かって物を投げる人間の数が増えているのだ。

子供だけではない。大人も混じっている。

街の人間全てが、黒猫の敵であった。

黒猫はそれらを軽快に避けながら通りを疾走していく。

人間とすれ違う度、悲鳴や、時には怒号や罵声が投げかけられる。

それでも、黒猫は意に介した様子はない。

孤独には慣れていたから。

物心ついた時から、黒猫は独りだった。

親も、兄弟も、友達もいない。

黒猫はそれを寂しいとは思ったことがなかった。

むしろ、孤独であることを望んでいた。

ずっとそうして生きてきたから。

別に食べる物には困らないし、寝る場所だってある。

それに何より、誰かを思いやることが煩わしいから。

独りで気ままに生き、そして独りで死んでいく。

そんな生き方に黒猫は何の疑問も抱くことはなかった。

昼間はあれほど賑わっていた大通りも、日が落ちた今ではすっかり静まり返っていた。

月と星空の下、黒猫がその身を闇に溶け込ませながら道の真ん中を歩く。

こうしてゆつくりと大通りを闊歩できることに、黒猫は満足していた。

だが、その足取りはどこかぎこちない。

黒猫は、足に傷を負っていた。日中の逃走劇で付けられた物だ。先端付近の毛が血で濡れ、時折赤い足跡を道に残している。きつと翌朝、誰かがこれを見つけたら、驚き、怒りを燃やすのだろう。そんなことを思いながら、黒猫は傷口をぺろぺろと舐めた。

再び歩き出そうと、前足を出した所で黒猫が立ち止まった。

誰かの視線を感じたのだ。周りに憎まれているが故に身に付いた察知能力とでも言うのだろうか。

黒猫が視線を感じた方向へ顔を向ける。

そこには一人の青年が壁にもたれながら座っていた。

服装を見るに、決して裕福だとは思えない。

スケッチブックと筆を手をしているのを見て、黒猫は青年がどういう人間なのかを把握することができた。

「こんばんわ、素敵なおチビさん」

青年が口を開いた。そのまま、黒猫の元へと近付いてくる。

不思議なことに、黒猫は逃げようとはしなかった。普段なら、人間が近付いてくれば真っ先に駆け出すのに。

恐怖のあまり、足が動かなかった訳ではない。
青年が放つ空気に、黒猫は戸惑っていたのだ。

黒猫の目の前まで近付くと、青年はその場にしゃがみ込んだ。二人の目線が近くなる。

「僕ら、よく似てるね」

一体、コイツは何なんだ？

自分をじつと見つめている黒猫がそう思っていると、青年の顔が険しくなった。黒猫の全身に緊張が走る。

だがそれは一瞬だけのことで、すぐに青年の表情は変化した。

「……怪我してるじゃないか。大丈夫かい？ それにしても、酷いことを……君は何も悪いことをしてないのにね。ただ黒猫なだけだというのに」

青年はひどく心配そうな声で、傷口に視線を向けた。

黒猫は戸惑いっぱなしだった。

この人間は、何でこんな風に接してくるんだ。

他の連中みたいに石を投げ付けたり、棒で叩こうとしてこないのか。

しかも……コイツ、笑ってる。

黒猫の身体が軽くなった。

青年が抱き上げたのだ。

「とりあえず僕の家においでよ。その傷の手当てをしなきゃ」
そのまま抱えられた所で、黒猫の中で『何か』が脈打つ。

身体が温かいようで……心臓がどこか締め付けられるようで……

何だよ……何なんだよ……

やめろ……！ やめろよ……！！

感情が限界点を超えた。

そしてそれは恐怖へと変わる。

「わっ……どうしたんだい？」

黒猫が暴れ始めた。

手足をばたつかせ、所構わず爪で引っ掻いて。

根付いている何かを掻き消すように、必死に青年の腕の中でもがいた。

黒猫は青年の指に噛み付いた。青年が小さく声を上げ、腕の束縛が少したが緩む。その隙に黒猫が青年の腕から飛び降りた。

地面に着地した際、傷口に痛みが走ったが、それでも構わず黒猫は走り出した。

「あつ、どこに行くんだい！？」

夜の大通りを、ただひたすら走る。

前に広がっているのは、まるで孤独という名の逃げ道のように。

ここまでは追いかけてこないだろう。

ある程度走った時点で、黒猫は立ち止まった。

どうせ、さっきの奴も単なる気まぐれで俺に声をかけたんだ。
他の奴なんか信用できるものか。

それに、俺は情けなんかかけられたくない。
そんなの……うざったいだけだ。

「心配したよ、こんな所まで走ってきたんだね」

後ろから声をかけられ、黒猫の身体が飛び上がる。ついさっきまで聞いていた、聞き覚えのある声。

恐る恐る振り返れば、そこにはやはり青年が立っていた。
月をバックに微笑を浮かべるその姿が、黒猫の恐怖を煽る。

黒猫はまた、走り出した。

立ち止まっては逃げ、立ち止まっては逃げ。

そんなことを、黒猫は何回も繰り返した。

どれだけ逃げても、変わり者の青年は黒猫について来た。

どれだけ逃げられても、青年は怒ることも悲しむこともなく、微笑を崩さない。

何度も逃走を繰り返しているうち、やがて黒猫に体力の限界が訪れる。

立ち止まると同時に、荒い呼吸を繰り返してその場にへたり込んでしまう。傷口がズキズキと痛む。

「あれだけ走ったら、さすがの君も疲れたんじゃないかい？」

やはり、変わり者はついてきていた。かけっこに勝った子供のよ
うな笑顔を見せながら、青年が言う。

黒猫とほぼ同じ距離を走ったにも関わらず、青年は息一つ切らせていない。

「ほら、もう諦めて僕の家においでよ。」

大丈夫、誰も君を傷付ける人はいないから」
黒猫に向かって、青年が両手を差し伸べる。
だが、黒猫にはそれに応えるだけの体力は残っていなかった。
もしくは、半ばどうでも良く思っていたのかも知れない。
黒猫は瞳を閉じかけ、その場に丸まった。

やわらかくて……あつたかい……

それが、意識を失くす前に感じた、黒猫の最後の感触だった。

寒さに、黒猫は目を覚ました。

黒い身体を身震いさせ、床から椅子、椅子からテーブルへと跳躍していく。

すっかり手馴れた、いつも通りの動き。

最後に、テーブルから窓際のベッドへと飛び移る。

そこは外がよく見える、黒猫の特等席。

雪。

窓の外では、雪が深々と降っていた。

黒猫は雪が好きではなかった。

雪は冷たくて寒いから。

暖かいはずのゴミの中に埋まっていたても、そのまま眠ったまま死んでしまっんじゃないかと思ったほどに。

「雪を見ているのかい？」

いつの間にか、黒猫の背後に男が立っていた。

それは紛れもない、黒猫を抱き上げた青年である。今日もスケッチブックと筆を携え、穏やかな微笑を黒猫に送っている。

「こうして君と雪を見るのは、今回で二度目だね」

ベッドに腰掛けながら、青年も窓の外に目を向けた。

黒猫は逃げようとしなない。

ただ静かに、じっと窓の外の雪を見つめていた。

「そういえば、そろそろ君にも名前を付けてあげないとね」

視線を黒猫に戻し、青年が言った。

名前。

自分に名前がないことに、黒猫は今気付いた。

今までは必要がなかったから。

「雪を見ていたら、とてもいい名前が浮かんだんだ」

そんなことを言いながら、青年は手元のスケッチブックに筆を走らせる。

書き終わると、そのページを表にして黒猫に見せた。

『HOLY NIGHT』

真っ白なページの中央に書かれた筆記体に近い文字が、黒猫の目に入る。

「『黒き幸』ホーリーナイト　どうだい、いい名前だろう？　君

のその素敵な黒い身体と、この雪にちなんで付けてみたんだ。それに……今日は聖なる夜だからね」

黒猫は嬉しそうに、にゃあと一鳴きした。それを聞いて、更に青年から笑顔がこぼれる。

「そうかそうか、そんなに喜んでくれると僕も嬉しいよ。それじゃあホーリーナイト、ご飯にしようか。今日は特別な日だから、ご馳走を用意したんだよ」

黒猫を抱き上げる青年。

もう、黒猫が抵抗することはなかった。

そして、いつの間にか雪のことを好きになっている自分に気付いた。

青年は絵描きだった。

彼が主に描くのは、街やその周辺で見た景色を描いた風景画や人物画。それを路上で売って、彼は生活の足しにしていた。

だが、彼の描いた絵の売れ行きは芳しくなかった。

それが技術的な問題なのか、もしくは別の要因が問題なのかは分からない。

ただはつきりしているのは、青年の生活が決して経済的に豊かではなかったということ。

それでも、青年は今の生活に不満を抱くことは決まらなかった。

幸せだったから。

あの夜に出会った、大好きな友達がいつも側にいてくれるから。

そしてそれは、彼の方にも言えることであつた。

「聞いてくれよホーリーナイト！今日は絵が売れたんだよ！しかも2枚も！」

青年が嬉しいと、彼も嬉しくなつて。

「今日は特に冷えるね」

.....。

「ありがとう、ホーリーナイト。すごく温かいよ」
青年が温まると、彼も温かくなつて。

彼は完全に、青年に心を開いていた。
自分に始めてできた友達。

彼は青年との、温かい日々の暮らしが大好きだつた。

いつまでも、こうやってくっついて甘えていたい。
いつまでも、ずっと一緒にいたい。

「ほらほら、動いちゃダメだつて。あと少しで描き終わるからさ」
ガタガタ。

「終わったらご飯にするからさ」
ピタリ。

「そうそう、いい子だね」

それでも、そんな願いは長くは続いてはくれなかった。

いつもよりも寒い、雪の降る朝だった。
ベッドの中で、彼は目を覚ます。

あれ？

アイツ、いないぞ？

いつも自分が起きるまで、毛布にくるまりながら温めてくれている友達がいない。

不思議に思った彼は、ベッドからもぞもぞと這い出る。

……………！

床に着地した瞬間、彼の表情が凍り付いた。

暖炉の前でうつ伏せになって横たわっている、友達の姿。

違う、眠ってるんじゃない！

彼にはすぐ分かった。

すぐさま、火の付いていない暖炉の前へと駆け寄る。そして、青年の顔を覗き込んだ。

「……………やあ、おはよう……………ホーリーナイト……………」

青年は微かな声に乗せて、いつもの言葉を乾いた唇から紡いだ。

「参ったな……元気だけが、僕の取り柄だったのに」
ベッドに横たわる、友達の姿。

日に日に弱っていくその様を前に、彼は何もしてやれなかった。

彼は自分の無力を呪った。

大切な友達が苦しんでいるのに、何もしてやれない。

「ははっ……ありがとう」

こうして、身を寄せてやることしかできない。

それが何よりも許せなかった。

「ごめんね……ろくに、君の世話もしてあげられなくて」
そんなことない！

彼は必死に友達の言葉を否定した。

この家に来てから今日まで過ごしてきた間、青年は一度たりとも彼に食事を与えない日などなかった。

嵐の日でも、雪の日でも。

そして、絵が売れなかったと苦笑していた日でも。

例えその結果、自分の食べる物が極端に減ったとしても。

毎日欠かさず、青年は黒猫に食事を与えていた。

ここしばらくの間、青年の描いた絵は一枚も売れることはなかった。

なけなしの金とはいえ、収入が無くなってしまえばどうすることもできない。

蓄えなど無いに等しいものだ。

食べ物を買うこともできないし、暖を取ることもままならない。

こうして倒れてしまっても、医者に行くこともできない。

働き口を見つけるにしても、よそ者の青年を雇ってくれるような場所はこの街には存在しなかったのだ。

前兆が無かった訳ではない。

倒れる前から身体は痩せ細り、唇や肌もガサガサに荒れていた。

それでも、青年は彼の前で苦しそうな素振りを見せることはなかった。そして、笑顔を絶やすことも決してなかった。

皮肉なことにも、変わることはない青年の温かさのせいで、彼は気付けなかったのだ。

だが、青年は虚勢を張っていた訳ではない。

本当に幸せだったのだ。

「ねえ……ホーリーナイト……」

視線の定まらないまま、うわごとのように青年が呟く。

良かった、まだ生きてる。

名前を呼ばれ、彼は嬉しそうに擦り寄った。

「君に、一つだけ……頼みたいことがあるんだ……机の上にある、紙とペン……あと、封筒も持ってきてくれないかな……」

言う通り、彼は机の上に飛び乗って、紙とペン、そして封筒を口にくわえて青年の前に置いた。

礼の言葉の代わりに青年は彼の頭を撫で、震える手で紙にペンを走らせ始めた。

温かいけど……ガサガサしてる。

撫でられた時、彼はそう感じた。

もっと早く気付いていれば、店からくすねてでも食べ物を持ってきて渡してやれば、こんなことにはならなかったかも知れないのに

……
いや、でもそんなことをしても、コイツは食べてはくれないだろう。

でも……

そんなことを彼が考えていた内に、青年のペンが止まった。

青年は書き終えた紙を丁寧に折りたたみ、小さな白い封筒に入れ、紐で結わいて封をした。

完成した一通の手紙を、黒猫の前に置く。

「走って……走って、こいつを……届けて欲しい。……絵描きになるという夢を見て、飛び出した……僕の帰りを待っている……恋人の元に……」

コイビト。

いつか、嬉しそうに青年が話してくれた言葉。

自分と同じくらい、大好きな人のこと。

「僕の故郷は……山を越えた先の村にある……そこが一番奥の、庭に大きな木がある家に……彼女はいるから……頼まれて、くれるかい……？」

もう枯れてしまった笑顔を向け、青年は弱々しく言葉を告げた。

嫌だ！ 死んだら嫌だ！

必死に彼は訴えた。

それでも、心のどこかにある冷静な部分で彼は理解していた。
もう、どうしようもないことを。

彼は鳴いた。

「ありが……とう」

もう一度、青年の手が彼の頭に添えられる。

そのまま彼は青年の側に身を委ねた。温もりを確かめるかのよう
に。

「今まで君と過ごしてきた時間……僕は……とても幸せだった……
本当に……ありがとう…… ホーリーナイト…… 僕の、大切
な…… 親、友……」

そのまま、青年は動かなくなった。

穏やかな顔を彼に向けたまま、まるで眠ってしまったかのように。

同時に、後ろでバサバサという音がした。

振り向くと、何枚もの紙が床に散乱していた。不安定な体勢に耐
えられなくなったのだろうか。

そこに描かれていたのは、全て黒ずくめの絵。

窓辺ですました顔をしている黒猫の絵。

猫じゃらしと戯れている黒猫の絵。

食事をしている黒猫の絵。

気付かぬ間に描いたのか、ひなたぼっこをしながら眠っている黒
猫の絵。

彼はベッドに横たわる友達に目をやった。

不吉な黒猫の絵など売れはしないのに。

それでも、アンタは俺だけを描いてくれた。

でも、それ故にアンタは冷たくなってしまった。

その間はほぼ一瞬だった。

彼は手紙をくわえ、弾かれたように窓の隙間から飛び出した。

手紙は、確かに受け取った！

後編

どれだけ走っただろうか。

街を出て、森を抜けて、そして今は山道の途中。

彼はほとんど休むことなく、雪の降り積もった道を走り続けていた。

今も空からは雪が降っていた。

舞い散る純白の結晶がぼつりぼつりと、漆黒の身体に溶けて消えていく。

こんなに走ったのはあの時以来だ。

そんなことを彼は思う。

でも、もう今は自分を追いかけてくれる人はいない。

それを寂しいとは思っていなかった。

信じてくれる人がいるから。

口にくわえた、今は故き親友との約束があるから。

日が沈み、また昇る。

彼は走っては歩き、わずかな休息を取ってからまた走るということを何度も繰り返した。

そんな奮闘が実ってか、彼は普通の人間が辿り着くよりもずっと早く山の頂上を越え、下りに差し加えることができた。

少し休憩しようと思つた彼が足を止めた時、頭に鋭い痛みが走った。
「やった〜！ 大当たり〜！」

後ろでは子供がはしゃいでいる。その手に握られているのは、やはり小石。

その声を聞き付けた他の子供が、そろそろと集まってくる。

「どうしたんだよ？」

「悪魔だよ！ 悪魔の使者がいるんだよ！」

「あ、ホントだ！ よ〜し、やつつけちゃえ〜！」

「おーっ！」

掛け声と同時に、雪玉が、小石が彼に襲いかかる。

黒猫はため息を吐いて、再び走り始めた。

「悪魔の使者が逃げたぞ〜！ 追いかける〜！」

悪魔の使者、か。

何とでも呼べばいいさ。

俺には消えない名前があるから。

ホーリーナイト。

『聖なる夜』と呼んでくれたアンタ。

優しさも、温もりも、俺にくれた物全てを詰め込んでそう呼んでくれたアンタ。

何となく分かった気がする。

こんな俺が生まれて来た意味。

ずっと周りから忌み嫌われて、孤独だった俺が生まれて来た理由。

それはきつと、この日のためだったんだ。

だから、俺はきつと届けてみせるよ。
どこまでも走って。走って。
アンタとの約束、きつと果たしてみせる。

どこまでも走るよ。

*
*
*

何度も石を投げられ、追いかけられ。
時には命の危険に晒されながらも、彼は未だ走り続けた。
そんな彼の目に飛び込む、希望とも言えるべき存在。

なだらかな下り坂の先に小さく見える、複数の寄り集まった家。

あそこか……！

あそこに、アンタのコイビトがいるんだな！？

彼は駆け出した。

下り坂に乗って、先程よりも速く。

ついに彼は辿り着いた。親友の故郷に。
もう少しで、アンタとの約束を果たせる。

彼は足を踏み出すが、次の瞬間、視界が90度回転した。

彼の身体には既に限界が訪れていたのだ。

体力はほとんど使い果たし、全身傷だらけで、出血も相当ひどい。
満身創痍と言っても何の差し支えもない状態。

それでも、彼は決してここで終わらせようとはしない。
立ち上がるべく、足に力を入れる。

しかし、それすらも彼には許されてはいなかった。

「黒猫だ！ 黒猫がいるぞ！」

「きったねえ、コイツ血だらけだぜ！」

周囲から浴びせられる罵声。

「お前なんか生きててもしょうがねえんだよ！ さっさと死んじまえ！」

「悪魔の使者め！！！」

あちこちから襲い来る暴力。

背中に凄まじい痛みが走った。

視界が薄暗くなっていく。同時に遠ざかっていく意識。

痛みも、罵声も、全てが遠い世界へと消えていく。

手紙を……届けないと……

……手紙！？

急速に意識が引き戻された。

目の前には、一通の手紙が落ちている。

そうだ、手紙を……コイビトに届けないと。
こんな所で倒れてる場合じゃない。

彼は手紙を口にくわえ、足に力を入れる。

今度は邪魔されることはなかった。

先程まで罵声と暴力を浴びせていた人間達は、既にいなくなっていた。死んだと思い、そのままにしていったのだろうか。

だが、力が入らない。足はガクガクと震えるだけで、言うことを聞いてくれない。

感覚もなくなっていた。寒さも、餓えも、そして痛みもほとんど感じなくなっていた。

ただ、どうしようもない眠気だけが襲ってくる。

彼は必死に抗った。

この眠気を受け入れてしまったら、もう二度と立ち上がれない。

畜生……負けるか……

負けてたまるか……！

俺は……ホーリーナイトなんだ……！

親友がくれた名前を呟き続ける。
何度も、何度も自分に言い聞かせる。

彼は不思議な感覚を覚えた。
そうしていると、枯れ果てた身体でも力が湧いてくる気がしたのだ。

それは錯覚ではなかった。

彼は……再び立ち上がっていた。

片耳は削げ落ち、自慢だった鍵尻尾も半分から先がなくなっている。

それでも、彼は走り出した。
いや、もはやそれは走っていると呼べる代物ではない。
ほとんど足を引き摺りながら進んでいたからだ。遠目から見れば、
薄汚れた雑巾が動いているようにしか見えないだろう。

そんな彼を突き動かしているのは、ただ一つの思い。

足が千切れてもいい。
もう動けなくなってもいい。

この手紙を届けられれば、それでいい。

一人の女性が、夕闇が滲む水平線の彼方を見つめていた。風景に同化したように、微動だにしない。動いているのは、長い黒髪のみ。

風にそれを揺らせながら、彼女は何を思っているのか。

女性の家は村の最奥部、眼前に海を臨む岬の所にあった。やや広めの庭には一本の大きな木が立っており、女性はその隣で海を眺めるのが好きだった。

しかし、女性は物足りなさを感じていた。あと一つ、大切な物が足りないから。自分をこの場所に残していった恋人が、まだ隣にいない。

子供の頃から、二人でこの景色を眺めているのが日課のようなものだった。

明るいうちから日が沈むまで、一日中その場所にいることも珍しくはなかった。

不思議と、飽きがくることはなかった。

いつしか、恋人はその場所で絵を描き始める。

何枚も、何枚も同じ景色を描き続けた。

そこをバックに、自分のことを書いてくれたこともあった。

照れくさそうに恋人にその絵を渡された時、女性は思わず涙を流してしまった。

二人でいる時に、彼女が初めて流した涙である。

時は過ぎ、やがて恋人は生まれたこの村を去っていった。

夢を叶えて、必ず戻って来る

そう言い残し、その手にスケッチブックと筆を携えて。

その日以来、女性は毎日、一人でこの場所を眺めていた。
いつか、夢を叶えた恋人が戻って来る日を待ちながら。

日がほとんど沈みかけた頃、不意に女性が水平線に背を向けた。
女性はいつも、日が沈み切る前に家に戻るようにしていた。

家に入ろうと歩き出した所で、女性は気付く。

ドアの前に、何か黒い物体が佇んでいる。その物体が残した物が、
庭の入り口からずっと、赤黒い軌跡が雪の上に刻まれている。

不思議に思った女性は小走りでそこへ駆け寄る。

女性が小さく息を飲む。

黒い物体の正体は、それは生き物と呼べるのかどうかも疑問なほど、
傷付き、憔悴しきった黒猫だった。

「ひどい……黒猫だからって、こんなこと……」

女性はしゃがみ込み、黒猫に手を触れようとするが、ぴたりと手が止まる。

口に何かくわえていることに気付いたのだ。

それに気付いたと同時に、黒猫が口にくわえていたものが雪の上に落ちる。

読んで……くれよ……

まるで、黒猫が女性にそう言っているかのように。

それが伝わったのかは分からない。

女性は困惑しながらも、一枚の紙切れを手に取った。

それは雪に濡れ、血を被り、今までの過酷な道の中ですでに
れよれになっていた。

しかし、しっかりと手紙としての外見を留めている。
差出人を確かめるべく、女性は手紙を裏返してみた。

短い悲鳴にも似た声が響く。

裏に小さく書かれていた名前は、間違えるはずもない、自分がず
っと待っている人の名前だった。

焦っているかのように、女性は震える手で封を解き、中身を取り
出した。

『今まで、ずっと連絡もしてなくてすまない。』

……君がこの手紙を読んでいる時、僕はもう君の側へは戻れない
だろう』

「……………っ！」

『思えば、君にはいつも心配をかけて……』

震えた、いびつな文字で手紙に綴られていたのは、謝罪の言葉。
結局、夢を叶えることはできなかったこと。
故郷に戻っては来られなかったこと。

迎えに行つてやれなかったこと。

『……でも、この道を選んだことに後悔はしていないんだ』

その後には、こんなことも書かれていた。

あの街で一人だった自分に、友達ができたこと。
友達と過ごした日々は、とても楽しかったこと。
親友のおかげで、最後まで幸せでいられたこと。

そして、最後にはこう綴られていた。

『最後に君に頼みたいことがある。

この手紙を君に届けてくれた、僕の大切な親友……『ホーリーナイト』のことを、君に頼みたい。

さようなら……心から愛する人』

ぽつり、ぽつりと雫が紙の上に落ちる。

雨や雪が降り出した訳ではない。

『……本当に……しょうがない人……』

困ったような、泣き笑いの顔で、女性は独り言のように呟く。
『でも……あなたはそういう人だものね……』

涙を零しながら、女性は恋人の親友に目をやる。

『ホーリーナイト……ね？ あなたも、本当に……』
声を失った女性が凍り付く。

手紙が、雪の上へと落ちた。

「本当に……良く頑張ったわね……」

自分の服が汚れることも厭わず。

女性は、もう動くことのない恋人の親友を抱きしめた。

「お疲れ様……ここまで辛かったでしょう？」

温かい雫が傷付いた身体に落ち、慈しむように染み込んでいく。

「もう、頑張らなくてもいいのよ……ゆっくり休んでね……」

孤独だった黒猫にできた、初めての友達。

友達はやがて、親友へと変わった。

その親友と交わした、最初で最後の約束。

今ここに……その約束は果たされた。

彼の表情は、まるで眠っているかのように穏やかだった。

女性は今日も海を見ていた。

もう、誰も自分を迎えに来ることはない。

それを知りながらも、彼女はそうし続けた。

以前と違う点は、女性はもう寂しいとは思っていなかった。
ずっと感じていた物足りなさも既にない。

女性は隣の木に視線を移した。

一番上から徐々に視線をずらし、最後には根元。

そこには、木の板が地面に突き刺さっていた。
板にはこう刻まれている。

聖なる騎士” HOLY KNIGHT”、ここに眠る

* * *

ここ、どこだ……？

辺りを見渡しながら、彼はそんな感想を漏らした。
寒くもなく、暑くもない。

親友が絵を描き始める前の紙にも似ている。
何もなく、一面真っ白な世界。

いつからここにいたのかは分からない。
家に着いて、手紙をコイビトに渡して、それで……
とにかく、気が付いたらここにいた。

更に、あれほどボロボロだった身体も、何事もなかったかのように
完治していた。

訳が分からない。

彼がそう思い始めた時だった。

えっ……！？

純白の彼方に彼は見た。

ホーリーナイトという名をくれた、大切な親友の姿を。

ねえ、俺……頑張ったよ？

アンタとの約束、ちゃんと果たしたよ？

次から次へと浮かんでくる言葉。

そんな彼の伝えたいことを全て読み取ったかのように。

親友は頷き、そして笑った。

彼の大好きな、穏やかな日差しのような微笑。

え……？

彼は、自分の視界がぼやけて見えることに気付いた。

身体の中から熱い物がこみ上げ、目から溢れて流れていく。

石が当たったりした時に湧き上がる物とは違う。

もっと温かくて、胸が締め付けられるようで……

痛くないのに……悲しくないのに……

こんなに嬉しいのに……

何で俺……泣いてるんだろう？

親友がまた小さく頷き、両手を広げる。

彼は走り出していた。

これから……ずっと一緒だよ……

FIN .

後編（後書き）

（。。）＜BUMP OF CHECKINは実はよく効く音楽の一つだったりします。estです。

（。。）＜独特の荒削りな感じが他には無い、バンブならではの世界を作ってるので。

（。。）＜黒猫も青年も、その最後は幸せだったと思います。

（。。）＜ラストに書き加えたオリジナルの部分は、あくまで私の解釈です。ハッピーエンドがいいんじゃないかな、と思ってます。

十二月初旬 フロントガラスに霜びっしりな朝っぱら est
拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1538d/>

HOLY 『K』 NIGHT

2010年10月11日13時24分発行